

第9回「泉大津市オリアム随筆賞」

【佳作】

織姫の涙

和田真理子・大阪府河内長野市

「ええな、自分の思う人と結婚できて。おばあちゃんは、おじいちゃんと結婚したなかってん。」

なんと答えていいのかわからなかった。衝撃の告白を聞いたのは、二十四年前。結婚の報告を祖母にした時だった。確かに、祖父の葬儀でも涙ひとつ見せなかった祖母。気丈に振舞っているからとばかり思っていた。

大正末期、奈良の田舎で生まれた祖母は、病弱な両親と姉の代わりに、第二人の世話を朝から晩までしていた。やんちゃな弟たちが近所で問題をおこすと、それほど年のかわらない祖母が親代わりに謝罪に行くことも度々だったらしい。大叔父たちが、後に祖母に対して感謝の言葉をよく口にしていた。

戦争の色が濃くなってきた頃、祖母は口減らしのため、京都へ奉公に出されることになった。知り合いの全くいない土地へ家族のためにひとり行くことになった祖母の心細さはいかばかりだったかと思う。あまりに辛い思い出を口にすらしなくなかったようで、母ですら祖母が京都で機織りの仕事をしていたとは知らなかった。

京都での生活に慣れないまま数年が経ったとき、祖母は奈良へ呼び戻されることになった。嫁いでいた姉が病死したのだ。さらに祖母には驚くことが待っていた。姉の後妻にならざるを得なかったのだ。当時は格下の家から嫁いだ者が亡くなった場合、責任をとって人を出さねばならなかったという祖母の言葉に絶句した。まるで、奴隷制度のようではないか……と。

戦争から戻ってきた義兄と二十歳で結婚した祖母は、祖父が大阪で商売を始めることとなり、またもや故郷を離れることになる。母を筆頭に三人の子供を育てながら、住み込みで働く従業員たちの食事や身の回りの世話。寝る暇もなかっただろう。物心ついた頃、お絵描きをする私の横で、祖母が最後にお櫃に少し残ったご飯にお茶をかけ、お漬物と一緒にかき込む「超早飯」を何度も見かけた。そして、休息することなく仕事に戻る。

働きに働いた祖母は、突然手の震えを訴え字が書けなくなった。脳内出血だった。まるで、糸がプツンと切れたかのようにだったが、持ち前の辛抱強さでリハビリに励み回復した。しかし、仕事に復帰できなかったことが大きく影響したのか、どんどん元気をなくし、二度目の出血後、施設に入らざるを得なくなった。

「一生懸命働いて、ようやくゆっくりできる頃にかわいそうに……」と周りは言った。だが、お見舞いに行くたび、言葉はなくとも穏やかな表情で、じっと見つめてくれる祖母の

瞳は優しくかった。

施設での生活が十年になった頃、肺炎をくり返すようになった。呼吸が荒く、見ているのも辛いとき、思わず言ってしまった。

「おばあちゃん、よう頑張ったね。もういいよ。何も心配せんと、ゆっくり眠ったらいいからね。」

私の言葉に、祖母の目には涙が溜まった。話せなくても、言葉は理解できていたのだと思う。祖母の涙を見たのは、それが最初で最後だった。あまりにも辛いことが多すぎて、泣くことができなくなっていたのだろうか。祖母の中で、泣いたら負けという気持ちがどこにあつたのかもしれない。いや、泣いても何も解決しないとの数々の経験がそうさせていたのかもしれない。

その翌日、祖母は旅立った。九十一年を駆け抜けた。最期には間に合わなかったが、まだ温かく、すやすやと眠っているかのようだった。

思えば、いつも他人ファースト。自分の気持ちを表に出すことがない祖母は、悲しいドラマやニュースを見ても感情を表すことはなかった。常に人と人の間に立ち、人どうしの気持ちしが絡まらないように、自分の周りにいる人が気持ちよく過ごせるようにしていた。祖母と出会う人たちが縦糸と横糸のように交差した。まるで、機織り機のような祖母の人生。祖母が京都でどんな布を織っていたのか残念ながら実物を見ることはできない。だが、祖母が自らを犠牲にして織りなしてくれた家族や周りの人々は、柔らかな布のようだ。祖母が残してくれた最高の織物だ。彼らに包まれ、育まれた私は祖母に感謝してもきれない。何よりも、祖母が祖父との結婚を承諾していなければ、私は今ここに存在していない。

「おばあちゃん、好きな人いてたん？」

「おった。」

二十四年前、もつと聞いておけばよかった。織姫様のような祖母が、心の彦星様と今頃会えているといいのだが……。